

資料紹介

うたた寝の目さまし

著者 梶川成人

(当時、御預所代官役兼祐筆見習)

資料提供 並河正明

(会員 佐伯市常盤西町)

文書解説 鶴野博文

(会員 佐伯市田ノ浦町)

概要

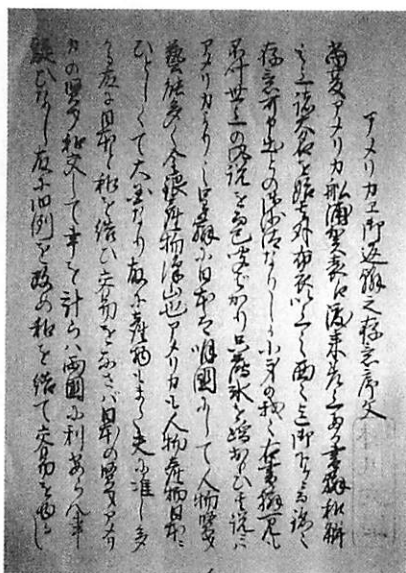
ペリーのもたらしたアメリカ大統領の国書に、時の佐伯藩士梶川成人は、どのような感想や意見を持っていたのでしょうか。

一 はじめに

黒船来航によって鎖国太平の長いうたた寝から目を覚ませられた幕府は対応策に全く無力のところへ十二代将軍家慶も嘉永六年の同月(来航の六月)に死ぬという大

混乱状態となり、それまでに前例のない、いわゆる「諮問政策」を採用、大名は勿論、藩士庶民にいたるまで広く意見を求めたのでこの文書も残ったわけです。

原文は祐筆(書き役)だけあって、書体・文章とも整然として読み易く、文意も読みながら理解できます。なお、文字・かな遣い・段落など一部調整しました。



二 本文 アメリカ工御返翰之存意序文

当夏アメリカ船浦賀表へ渡来、差し上げたる書翰、和解(和訳)の上、諸大名を始め其の外 布衣(ふい) (江戸時代無位無官の幕臣や諸大名の家士) 以上の面々迄お下げにて銘々の存意申し出づべしとの御沙汰なりしが小身の我々右書翰一見も仕まつらず世上の風説をのみ聞くばかり只薄氷を踏む思ひ。

その説二ハ、アメリカよりの書翰に、日本は文明国にして人物賢才藝能多く金銀産物沢山なり。アメリカも人物産物、日本ニひとしくて大国なり。故に産物もまた夫に準じ多かる故に日本と和を結び交易をなさバ日本の賢才アメリカの賢才相交して事を計らハ兩國に利あらん事疑ひなし。

故に旧例を改め和を結んで交易をゆるし心えなくハ先ツ五年か十年などして見て損あらハ其の節二至り止めんも可なり。もし旧例を守り交易を免さずんハ軍船を向けて戦わん。其時後悔すべからず。能々思慮をまわし天子將軍、安全長久たらん事を考え来春迄二返翰を認め置くべし。其の節は船を増して来らん。返翰に寄つては早速軍船數百艘を向けんとの書翰なるよし聞き知りぬ。

然るにこの節に至つても存意申し出でざる向き有るに依つて当月中二差し出すべしとのよし猶又御沙汰なりしが、我々も其の職に有る那らば及ばずながら早速に愚存も返翰し文に綴りて差し上げたしとハ思えども小身のかなしさハ平地に有りて星をつかまんとするが如し。只、庚申塚(こうしんづか)の猿になり目耳口を閉じて居んより外なし。

先づ、先づの事然す年か、てんて枝あり、
あり此れも可あり、若し例をせり、
軍船とて、我々も存意、
天子、將軍、安を長久たらん、
故と、海軍、一、
我々も存意、
申す、可、
て、
て、

世の有様を考ふるに明賢なるもの、たまたまひとりと、よき存意を述べるとも、大将の賢薄き時は、只多分に付き人とすれば一智も十愚のために誘われん事往古より其の例の少なからず。

もし賢者あらばこれを止めんに、その国に賢者なき由故なりと察したり。又、交易を免さば西国に利あらん。もし、心得なくば五年十年ためし見て、もし利なき時は其の時に止めんも可なりとハは愚者を進むるの意なり。

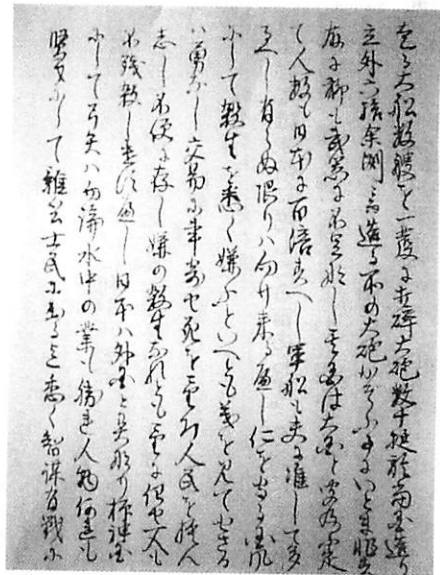
ためさずんば知る事の能わざるは愚なり。賢者なんぞ、これ等の事をためさずとも損益は目前の事を見るが如し。

たとえ利益あるにもせよ日本は利を好まず義を以て利とす。旧例をのみ守るに非ず。元より利を好まざる国風故に交易を免さざる也。この道理をよく会得して再び交易を乞ふことなかれ。

又、交易を免さざるに於いては軍船を数艘向けんとあらば勝手次第たるべし。何ぞ驚く事あらん。

今に始まらず元より外国の賊船を防がんために大砲用意有ることその数を知らず。この度新たに百里を走る大船数艘を一発に打ち砕く大砲数十挺を当国に於いて造りたて、外、六十余州にて造るところの大砲、数うるにいとま非ず。故に聊も武器に不足なし。

其の国は大國と聞き及ぶ。定めて人数も日本に百倍すべし。軍船もそれに準じて多かるべし。あらぬ限りは向け



乞ふ大砲数艘と一發に砕く大砲数十挺を当国に造りたて、外、六十余州にて造るところの大砲、数うるにいとま非ず。故に聊も武器に不足なし。

来るべし。

仁を守る国風にして殺生を悉く嫌うといえども、義を見てせざるは勇なし。交易に事寄せ死を望み人民を損じ不便に存じ、嫌いの殺生なれども望みに任せひとり残らず殺し遣わすべし。

日本は外国と異なり抑神国にして、弓矢は勿論、水中の業も勝れ、人物いづれも賢才にして雑兵士民にいたるまで悉く智謀あり。戦いに一騎当千の兵数ふるにいとま非ず。

物し居せれ、き必其様かして居下其蒸かれハ
為幸し長久あり八日年の満炭法士モ其の其様
あり人幸と仰くぞあり其志の者よりし
私望ハ快くするもの也是と示さくまに日本
仁義礼智信しるる事と云くまら事終るは
右に居候にふふあり

嘉永七年三月

嘉永七年
三月十四日
花押

梶川忠

嘉永七寅年（即嘉永六年、將軍死去のため）

十一月十四日 抜写 梶川忠（花押）

三 おわりに

この諮問政策の結果七百近い意見があつたが、勝海舟らのもの以外は殆ど見るべきものは無かつたという。例へば徳川斉昭らの、交渉すると見せかけ敵の大將を白刃一閃して倒し黒船を奪うとか、アメリカカ兵を酔わせてどうこうするなど、さらに、百年後の太平洋戦争時の一般の人々の米国の国家や軍事や兵士に関する滅茶苦茶な認識とか、意見などと比較して、この梶川佐伯藩士の文章現在から見ると、多少の誤認や飛躍などが見られるものの、当時極めて乏しい外国の情報を中心に理路整然と整えられており、恐らく佐伯藩士らの代表的意見をも伝えられているのではないだろうか。